

Б. Л. Исаев

『経済分析および計画化に
おける総合バランス体系』

Б. Л. Исаев, Интегрированные балансовые системы в анализе и планировании экономики, Москва, Изд. «Наука», 1960, 336стр.

1. 著者のイサエフ氏はソ連科学アカデミー中央数理経済研究所で、経済計画化に適用される国民経済バランス体系の理論面の改善を手掛けている研究者であると推察される。同氏が数年来個々の論文の形で発表したバランス体系の理論的再検討の問題を私は興味をもって読んできたが、ここに従来の業績が著書となって集約されたので書評を試みることとなった。

本書の特徴は——したがって書評の対象としてこれを取上げる理由は——次の2点である。

第1は、ソ連の経済学界ではここ5・6年の間に故ヴァインシュタイン教授を中心としたグループが西欧諸国の国民勘定体系に強い関心を寄せ、特にSNAの改訂作業がおこなわれるようになってから、その会計構造について詳細な検討を始めた模様であるが、本書は、私の知る限りでは、ソ連で初めて国民勘定体系の内容を系統的に解説した文献であり、従来この分野になじみの薄かった大方のソ連の研究者・学生の啓蒙を意図している点である。

第2は本書のなかで著者は、従来ソ連の計画統計当局により作成されてきた伝統的な国民経済バランス体系に方法論上大胆な批判を加え、SNA開発当初から採用されている複式簿記原理をそれに適用し、バランス体系の形式的整合性を進展させるための試案を提出している点である。そのさい複式簿記原理は新SNAの会計構造の説明にあたって用いられたマトリクス表示法によって具体化されており、全体として国民勘定体系の考え方に形式面で著しく影響されていることが読みとれるのである。周知のようにソ連では産業連関表の作成と産業連関分析の開発はすでに10年余前に始まっている。しかるに西欧の国民経済計算体系の主要環はこの産業連関表とともに国民勘定体系なのだが、後者の問題についてソ連の学界の反応が鈍く、最近のことがらにぞくする本書の出現までは系統的な研究が現われなかった。このこと理由は不明な点が多い。

2. 本書のタイトルは「経済分析・計画化における統合バランス体系」となっているが、ここでいう「統合」の意味は西欧諸国で通常いわれているような国民経済計算の統合を意味するのではなく、国民勘定の完全接合性に対応する意味をもつことを注意しておきたい。本書の内容中では国民勘定と産業連関表、あるいは国民勘定と国民貸借対照表との統合にかんする記述はあるが、実際には国民経済計算のサブシステムの相互関係の理論的解明は将来の問題として残し、著書では当面、社会的生産物の国民経済的循環過程のフローチャートとマトリクス表示法の研究にあてられているが、これはとりもなおさず国民勘定の完全接合体系の研究に相当するものなのにはかならない。

本書は次の構成をもっている。

序論

第一章 経済フローの複式記入法の形式的特徴

第二章 資本主義諸国の国民勘定体系

第三章 資本主義諸国の経済発展計画にたいする国民勘定体系の利用

第四章 複式記入法とソ連の国民経済計画計算

結論

3. 「序論」では経済循環を取引主体と取引種類の関係の総体として把握する視角が示され、このための方法として複式簿記原理を適用することの形式的優位性が強調されている。

第一章では序論でのべられた問題提起にたいする盛沢山の予備的考察がなされている。例えば経済的取引(取引主体、取引内容)の概念を用いて、ケネーの「経済表」、マルクスの「単純再生産表式」、「拡大再生産表式」が巧みに整理されている。また同じ趣旨で社会主義経済の循環過程が5個の経済主体と2個の取引カテゴリーを用いて記述されている(この場合経済的フローは20個となっている)。さらには現代の諸学者が考案した経済循環のデモンストレーション図式(フィリップス機械、ケムブリッジ国民所得マシン、サンジェの国民所得流体図、等)が紹介されている。そして上記のいわば図式的説明とならんで経済的取引の系統的表示法として、新SNAのなかで解説されているようなT字形勘定形式、多欄勘定形式、マトリクス形式が簡単に説明されている。要するにこれらの諸点はわが国の読者にとっては格別目新しい記述ではないが、ソ連の読者はそこから多くの啓蒙的示唆を受けるかも知れない。

第二章は資本主義諸国の国民勘定体系の発展と現状を

要約、解説している。前半ではペテイ、キング、等の創世紀の国富、国民所得推計から始まり、特に19世紀のフランスにおける推計(ラヴァージュ、ラグランジ)が説明されたあと、1930年代後半に生じた国民勘定体系の開発史に言及する。しかしこの時期におけるケインズの理論上、実際上の影響力についていささかも言及されていない点は不可解である。

後半では資本主義諸国で適用されている代表的な国民勘定体系の構造が解説されている。ここで取上げられている図式は旧SNA、新SNA、フランス、オランダ、アメリカのものであるが、特に新SNAの説明に重点がおかれている。そしてこの章の最後では、現在作業が進行中であるSNAとMPSの両体系の比較調整研究の結果が紹介されている。著者がここで取上げた内容は60年代前半に完成した欧州統計家会議の作業部会レポートであり、その後も研究が進んでいて、昨年(1970年)秋の国連統計委員会にたいしさらに精緻な研究結果が報告されている。事態の動きはまったく目まぐるしく、著者のこの部分の内容は既に陳腐化しているといわざるをえない。

4. 第三章は国民勘定体系の経済計画への適用の現状とその理論的諸問題の解明にあてられている。この章は著者の学問的経歴も手伝ってか、大部分の記述をフランスの国民経済計算の理論と実務の説明にあてている。その場合理論面の記述はジャン・マルシェフスキー(Jean Marczevski, Comptabilité Nationale, 1965)に依拠しているようである。とりわけ詳細に論じられているのは、フランスの第5次経済計画に適用された国民経済計算体系の解説である。これは大別して「物理的均衡モデル」(これは「総合経済表」ないし「源泉・使途勘定」をさす)、および「資金的均衡モデル」(これは「金融取引表」をさす)からなるが、著者は両モデルの経済的内容を方程式体系を用いて解説している。

この章の内容そのものはソ連、日本を問わず比較的なじみの薄い問題領域を取扱っているがゆえに興味をそそられるのだが、著者がフランスの国民経済計算体系にたいしいかなる態度をとるかが一向に明らかにされていないのである。資本主義諸国の国民経済計算体系にたいするマルクス経済学による批判の立場は、会計構造の批判と指標内容の批判とに向わなければならないであろうが、著者はフランスの国民経済計算にかんするこの部分でも、またSNA等代表的な国民勘定方式に触れた前章でも、指標内容の問題にはいささかも注意を与えず、これを定

義上の問題として別領域においている。このような問題意識はイサエフ氏の著書のしばらく前に出版されたクロフ氏の著書(B. M. Кудров, Статистика национального дохода США, 1966)のそれとくらべると見劣りする。

5. 第四章は本書のなかでもっとも積極的な部分である。著者はまずソ連の伝統的な国民経済バランスが、単式簿記原理のみにたって作成された文書の集まりであると断じ、経済的フロー間の依存関係を一層精密に関係づけるためには、複式簿記原理を積極的に援用しなければならないと主張している。著者のこの主張は一面誇張されている。現にマルクスの再生産表式などは若干の陰伏的経済量を追加すれば社会会計的取扱いが可能であるし、また国民経済バランス中の財務バランスを国民勘定と同様な表章形式で示すこともできるのである。しかし国民経済バランスの体系を構成する諸バランスを包括して統合バランス体系を作成するという点からみると、伝統的な国民経済バランスは確かにゴタゴタした内容がまざりあっていて、形式的整合性に欠けるところがあったということではできよう。

したがって著者はこの章で国民勘定マトリクスに対応する2種類の「総括的物量・資金バランス」を提示している点は興味深いのである。そのひとつは取引カテゴリー勘定、社会的生産物の生産・利用勘定、資金流動勘定、国外勘定の4勘定からなる勘定マトリクスで、最初にあげた取引カテゴリー(商品形態、所得形態、蓄積形態)の導入が従来の国民経済バランスでは不明確であった経済循環のディテールを明示するうえでメリットをもちうるであろう。もうひとつの総括的物量・資金バランスはエストニア共和国について実験的に作成されたもので、生産活動勘定、所得分配勘定、消費勘定、蓄積勘定、外国勘定の5勘定体系である。このマトリクスでは取引カテゴリーの導入は最少限におさえられ(商品形態、蓄積形態)、主として制度的部門・活動勘定マトリクスの性格をもっている。このいずれのものについてもフロー勘定とストック勘定の統合の問題が理論的に解決されておらず、今後の研究にゆだねられていることは、ソ連のこの分野の研究の進展がまだ若い段階にあることを物語っているものであろう。なおこの両種のマトリクスの優劣比較は著書のなかで明確には与えられていない。これはむしろ読者の課題であるといってもよいかも知れない。

ソ連の国民経済循環の理論的取扱いの方向が近年西欧諸国のそれときわめて類似していることは周知のとおりである。その一環として国民勘定体系の思想が社会主義

経済の分析に取入れられた第一弾が本書であるとしても、それが稔り多い成果をあげうるかどうかは、なお速断はできない。

【野村良樹】

ヴェ・エス・ダダヤン

『社会主義経済法則と最適解』

В. С. Дадаян, Экономические законы социализма и оптимальные решения. Изд-во «Мысль», Москва, 1970, 326 стр.

本書の著者ヴェ・エス・ダダヤンは、1933年生れのソ連の若い数理経済学者である(現職はソ連邦科学アカデミー中央数理経済研究所研究員兼モスクワ大学経済学部教授)が、すでに地域産業連関分析にかんする研究(ヴェ・コソフとの共著『計画計算の用具としての経済地区バランス』1962年)や、マルクス再生産表式の数学的精密化にもとづく再生産モデル構築の試み(『社会主義的再生産の経済=数学モデル』1963年)や、再生産モデルの一層の具体化とその成果の成長理論・価格理論への適用の試み(『拡大再生産モデルによる経済計算』1966年; 邦訳『計画経済と再生産モデル』, 新評論, 1971年)などによって、わが国のソ連経済研究者のあいだでもよく知られている。

ソ連における数理経済学、計量経済学の研究が、1956年のいわゆる「スターリン批判」をひとつの転機として50年代後半からいちじるしい進展を示しており、またこの新しい動きが、ソ連の計画経済に理論的支柱を与えること、そのために社会主義経済法則の諸命題を定量化しこれを具体的な統計数字と結合させることなどを共通の問題意識にしていることは、周知のとおりである。そのなかにあって、とくにダダヤンにみられる一貫した関心事は、個々の経済現象や経済過程の数理モデルの分析による社会主義計画経済の部分的効率化(部分的最適化)の問題ではなく、再生産モデルの分析にもとづくその全面的効率化の問題を総合的に論究しようとするところにあるといえよう。このことは、とくに63年以降のかれの著書や論文にうかがわれる特徴的な傾向なのであるが、ここで取りあげようとする『社会主義経済法則と最適解』には、とりわけ明瞭に示されている。この意味で本書は、ダダヤンのこれまでの一連の研究作業のいわば集

大成ともいふべき性格をもつものと思われる。

1959年にネムチノフは「現在とくに重要なことは、経済学者が社会的技師になること、経済科学が精密科学になることである」とのべたが、経済学を精密科学たらしめるためには、まず主要な経済諸法則を明らかにし、ついでそれらに数式的・数量的表現をあたえなければならぬ。本書においてダダヤンはこの観点から、はじめに社会主義の経済法則の概念規定をおこない、つぎのようにのべている。すなわち、生産手段の社会的所有関係としての社会主義の基本的生産関係に根ざし、しかも生産活動の客観的目的ならびにその達成のための必要・十分条件を規定するような認識されうる規範体系、そしてその侵害は社会主義経済体制の根本的な客観的長所の不十分な利用をもたらすであろうような規範体系の、社会主義のもとでの作用の客観的必然性を表現するところの科学的抽象を社会主義経済法則と名づける、と。このように規定された社会主義経済法則は内的に結合された単一の体系をなしているのであるが、この法則体系はかれによれば、社会的生産過程の経済目的ならびにその達成の条件と方法を規定する3つの法則から成る。つまり、いわゆる基本的経済法則、計画的・均衡的發展法則および価値法則がそれである。社会主義社会のこれらの主要経済法則は統一的法則体系の有機的構成部分なのであるから、基本的経済目的の実経済法則の定式化のなかには社会的生産の現の条件と方法の規定がふくまなければならないし、逆に、計画的・均衡的發展法則と価値法則のそれぞれの定式化のなかには、社会的生産の目的達成へのそれぞれの法則の要請が反映されていなければならない。そこでダダヤンは、これら主要3法則を以上の観点から定義しなおしたうえで、基本的経済法則を「社会主義生産の目的の法則」、計画的・均衡的發展法則を「社会的生産の最大効率の法則」、価値法則を「生産と労働の物質的刺激的刺激の法則」と呼びかえている。

本書の全体は、このような社会主義経済法則論から出発して、かれの名づける上記3法則のそれぞれの命題の定量化を探求し、そこからかえられる一般理論的な結論を社会主義経済の最適計画化・管理モデルの単一システムへと総合しようとするわけであり、したがって本書の構成は、社会主義経済法則論と社会的生産の目的の法則を扱う第1部、社会的生産の最大効率の法則を扱う第2部、および生産と労働の物質的刺激的刺激の法則を扱う第3部とから成り、これに経済理論の諸公準を簡潔に示した結語がつけられている。しかし与えられた紙数の制約から、ここでは本書のなかで評者にとって興味があったいくつ